令和８年度　第１回野洲市図書館協議会　議事録

◎開催日時　令和８年（2026 年）７月 10 日（金）午後１時 30 分～午後３時 30 分
◎開催場所　野洲図書館本館　会議室
◎出席者　　図書館協議会委員９名、事務局３名（図書館長、係長、書記）
　　※委員１名欠席（傍聴者なし）

館長：ただいまより令和８年度第１回図書館協議会を開催する。図書館協議員の任期は条例により２年であり、今年度は２年目の任期となる。委員の皆様には今後も図書館の運営について忌憚のない意見をいただきたい。学校の先生方においては年度ごとの割り当てが変わっており、昨年度委員をしていただいた吉田校長先生に代わり、今年は野洲北中学校の山口校長先生に委員に就いていただいている。しかし本日は公務でご欠席のため、出席された際にみなさんにご紹介したい。ほかのメンバーは去年と同じである。

例年、第一回目の協議会では教育長に出席いただいているが、今回は市長と教育委員会が直接協議をする総合教育会議が入っているため本日は欠席であることをご容赦いただきたい、また年度内どこかのタイミングで教育長、もしくは教育委員会の部長・次長の出席で開催できないか調整したい。

本日は 10 名の委員のうち過半数の出席があるため、野洲市図書館管理運営規則 第９条第２項の規定により、本日の協議会が成立していることを報告する。なお、この会議は公開を行うものであり、議事録は情報公開の対象になっており、後日図書館のホームページに掲載されるむね了承いただきたい。

それでは、これより議事に移る。進行は早川会長よりお願いする。

会長：暑い中お集まりいただき感謝する。では早速一つ目の議題に移る。「令和７年度野洲図書館事業報告」について。

館長：事務局より報告する。資料は①の事業報告【概要編】を主にご覧いただきたい。

令和７年度については（1）個人貸出の部分の通り、貸出冊数前年比プラス 1%と久々に伸びている。しかし、前年は 11 月に１カ月間、空調工事の休館があった。それを差し引くと若干落ち込んでいる状況か。貸出人数についても前年比プラス 4.4%。１カ月の休館の影響がどこまであったのかについては不明だが、こちらについては引き続き１人１枚カードを作っていただいて、大人から子供まで自分のカードで借りていただくという形で利用登録・貸出人数を増やしていきたい。予約受付数も前年に比べ 4.8%増、予約本受取ボックスの利用が順調に進んでいるだけでなく、直接本を探しに来るというよりは、あらかじめ予約を入れておいて自分の必要な本だけ借りに来るという利用法にシフトしているためという可能性もある。在架予約は利用者にとっては便利で、図書館のサービスの一環として続けている。しかしこれは本来の図書館利用の醍醐味である「自分が読みたかった本」の横にある本について「こんな本があるのか」という発見には繋がりにく

いところがある。私どもとしては図書館の棚を見て楽しんでいただけるような棚づくりを進めていく必要があり、同時に新しい本も入れる必要があると考える。
統計に戻らせていただく。貸し出し冊数の推移については資料にある通り。令和になってからのおおまかな流れを見てもらえるかと思うが、コロナになってからの落ち込みを取り戻し切れていない。これは全国的な統計でも概ね同じ状況。電子媒体へのシフトなど様々な要因が考えられる。
（4）利用状況の推移について、特に気になるのは表の 4 段目、図書冊数購入の部分かと思う。資料費の推移については、詳細を「令和 7 年度野洲図書館事業報告（資料編）」を参照いただきたい。結局のところ、市の図書費の減額の影響もあり、以前は 1 万冊程度買えていたものが、令和 6 年度には 6400 冊程度まで落ち込んでいる。近年の状況として、一人当たりの貸し出し冊数が減っている。図書館に来て、読みたいと思える本が減っている状況だと言わざるをえない。予算については粘り強く要求していくが、厳しい状況である。病院の建設もあり、市の財政はより厳しい資金繰りが求められる。その中で教育にどれだけお金をかけられるかはよりシビアな判断になる。もちろん予算の要求はおこなうが、手持ちの条件の中で効果的な蔵書をつくることが司書の腕の見せどころとなる。
（6）子どもと本をつなぐについて、団体貸出は順調で学校や園に本を届けられている。右側の小さい表は、毎年挙げている市内の 0～12 歳一人あたりの図書館児童書の貸出冊数の推移。令和 7 年度には微々たる増だが 27 冊に達している。学校司書の配置がおととしから始まり、子供たちの本を読むモチベーション、環境が整ってきているためか。この機会を逃さず、きちんと子どもたちに本を届けることを進めていく必要がある。同ページの一番下、参考として挙げている全国との比較について。人口 5～6 万人の市での貸し出し状況を比較して、野洲市は大きく変わらず、全国 5 番目。統計は 1 ～ 2 年ほど前のデータにはなるが、2023 年と 2024 年を比較すると、どこも貸出冊数を減らしている。白河市など、地方地域においては人口の減少が進んでいることも関わっているか。また図書館の評価のところでもご説明するが、このあたりの数字については、トータルの数字ではなく、一人当たりの数字をみていくことが大切か。
（7）だれでも図書館を利用できるしくみづくりについて、バリアフリーサービスと移動図書館、予約本受取ボックスについて書かせていただいている。バリアフリーサービスで特筆すべきは、郵送貸出の件数が減り、宅配が増えた点。宅配を活発に使ってもらえている。郵送貸出は障がい者手帳の所持などの利用条件がかなり厳しく、郵送を使えない方には宅配をご案内している。どちらも実利用についてはどちらかというと減少しているため、必要としている方へのＰＲが必要。アルプラ移動図書館については定着してきた。数字も伸びている。予約本受取ボックスについては、令和 7 年度 5 月からルールを変更し、取り置き期間を 5 日間から 1 日減らして 4 日間にした。回転数が上がるかと期待していたが、若干の変化しかなかった。しかし貸出の冊数は減っている。これはたくさん予約して大量に借りることが減り、必要な分をその都度予約されるようになったためかと思う。カウンター後ろの予約本受取ボックスで提供待ちのブックトラックは 2 台からなかなか減らず、ボックスが総量的に足りないという状況が続いている。
そのほか、蔵書については見ていただいた通り。詳しく見ていただく場合は資料編をご覧いただきたい。ＣＤなどは新しいものをなかなか受け入れられない中、寄贈で入れていただいたものを受け入れし何とか資料を増やしている。最後のページには事業などをまとめている。講演会のほ

か定例の「一日図書館員」や「化石とあそぼう」など。学校・園協力事業、館内でおこなっている特集などもご案内している。ブックスタートは、コロナ後の来館方式をとりやめ、司書が直接案内する方式に戻し、検診対象者には100%の実施ができている。

会長：何かあれば。

委員：私自身福島県出身なので白河図書館については調べていた。もともとは野洲と同じような傾向で利用者数・貸出冊数などが減っていたが、コミックを強化して蔵書の一割をコミック関係にした。子どもが家族と来館することも増え、コミックだけでなく他の本も貸出冊数が増えた。最終的に小学館が館内にコミック研究所をつくるなど今非常に注目されており、相乗効果を生み出している。どこの図書館も同じ部分で苦しんでいるが、手の打ち方になるほどと思った。

館長：コミックについては協議会でも何度か話題に挙がっている。昔は多くの人が同じ作品を楽しんでいた。共通の文化として利用者に共有することは大切かと思う。予算があればもう少し魅力的なコミックを入れたい。白河市は施策としてコミックに投資をしたと考えている。

委員：どの図書館も同じことで苦しんでいて、白河市はそれで成功している。

館長：子どもたちが今どんなコミックを読んでいるのかを把握するのは難しい。ただ入口を広げる、ということにおいては大切かと思う。

委員：野々市市も別の特色があったか。

館長：野々市市は施設として北欧的な図書館づくりをしている。様々な部屋を市民・周辺自治体の人が使える。そういうところで、かなり集客がある。

会長：ある意味野洲はオーソドックスなスタイルの中では非常に頑張っている方だと捉えている。
児童書の貸出冊数が増えている、つまり子どもは来ている。白河市はコミックの相乗効果で貸し出し冊数が増えたというが、予算はどれくらいだったのか。

委員：一昨年の数字になるが、資料費は3700万円、この中には雑誌などが入ってくるが、このうち図書費は3000万円で野洲の3倍。

委員：野洲は1100万円ほど。白河市は野洲よりも広い市で人口が5万人程度。

委員：活性化でいえば野洲の方が高いか。
ほかに質問はないか。なければ、次の議題に移る。令和7年度図書館事業評価の説明をお願いする。

事務局：資料③のシートをみていただきたい。

まずは、改めて評価の流れをお伝えしておく。本日は図書館の自己評価までを説明するので、それをふまえて、委員の皆さまには一度お持ち帰りいただき、コメントとＡＢＣＤの評価をつけて、後日事務局に提出していただきたい。事務局でとりまとめ、会長にお渡ししたのち、会長のまとめられた素案をもとに、次回第２回の協議会で審議して、最終の評価を決定していただくことになる。

では１番目のシート「市民の必要とする資料と情報の提供」から説明する。「令和７年度取組み」欄の通り、図書購入費は価格高騰分のみ少し増加しているが、蔵書のバリエーション充実には足りない。選書の際にはより厳密に精査をしている。新規登録や図書館利用を促す取組については、アルプラ移動図書館などで新規登録キャンペーンをおこなっている。また、「カフェおこしやす」など図書館の主催事業以外でも積極的にＰＲをおこなっている。

成果指標と目標について、一見増えているように見えるが、昨年の空調更新の休館を踏まえると横ばいかと判断している。

レファレンスの満足度については、数値では目標を達成しているが、資料④アンケートの14ページを見ていただくと、「レファレンスそのものを利用したことがない」という回答が全回答の半数を占めていることがわかり、この点は問題。レファレンスサービスの周知と利用促進の必要性がある。

以上を総合的に判断し、自己評価はＢとしている。

2番目のシート「こども・若者と本をつなぐ」の令和７年度の取組については、各学年へのブックトークなど読書に親しんでもらう各種の事業をおこない、子どもの手元に本を届けることができたのではないかと思っている。児童書については人気の本に偏らないよう、図書館で選書するものについては幅広いジャンルのものをバランスよく購入している。夏休みのイベントについてはYA世代を対象としたものをさらにブラッシュアップして実施した。また。令和７年度より新たに学校司書が入られたということで、学校図書館支援員との連携を密にし、より細やかな支援をおこなうことができたと考えている。

昨年度より野洲養護学校との連携も続いており、おはなし会などを実施している。

成果指標については、昨年の意見をふまえて変更している。今までは児童全体の貸出冊数だったが、年齢別の人口から一人当たりの貸出冊数を算出する形、利用者数も人口との比率で算出する形に変更した。より現状が明確に分かるようになったと考えている。現段階では昨年度まで指標としてきたものも残しているが、今回新たに作成した指標でよければ昨年までの指標は削除したいと考えているが、残した方がよいかについても協議いただきたい。なお、指標の部分が長くなったので協議委員の評価欄が１ページにおさまりきらず裏面になっているのでご注意いただきたい。

学校・園向けのサービスにより、子どもの身近な場所に本があるという環境は整備できたが、来館者数が伸びないのが課題。引き続き、子育て世代へのＰＲ・来館を促す取り組みを続けたい。今年度は新たに市が進めている野洲高校との連携に野洲図書館も参画予定。秋のブックフェスタにも野洲高校が参加してくださる予定。令和９年度から開始予定の移動図書館車による巡回で子どもたちの読書意欲が高められればと考えている。全体の貸出冊数は増加し目標には達していることと、事業報告にもあった通り12歳以下の貸出がわずかに増加したものの、ＹＡ世代は減少しており、図書館の自己評価としてはＢとしている。

３番目のシート「誰もが利用できる図書館サービス」に移る。取り組みとして、予約本受取ボックスではのべ 4,695 名の方に 12,980 冊、アルプラではのべ 297 名に 1,361 冊の貸出をおこなった。また、大活字本は 41 冊、外国語資料は 62 冊受け入れをした。野洲養護学校へは 6 回のおはなし会、2 回の図書館見学会をおこなった。そのほか、依頼を受けて地域への出張おはなし会のほか、地域包括センターが主催しているカフェおこしやすでは図書館の各種サービスなどの PR を実施した。小学校向けの移動図書館は３校に実施した。
成果指標と目標については予約本受取ボックス、出張貸出（アルプラ）は件数が伸びている。郵送貸出・宅配の利用者は減っているが、宅配の貸出件数は伸びている。ただ先ほどの話にもあった通り、宅配・郵送は引き続きＰＲが必要。令和８年度は移動図書館車の導入も進めているが、来館が難しい人も含め誰もが使えるような形を検討する必要もある。こうしたことをふまえて、自己評価はＢとしている。

会長：まずは１つ目のシートについて。何かあれば。

館長：実際の評価については次回となる。評価をするにあたり、何かあれば。

委員：レファレンスサービスについて。アンケートでは利用したことがないという件数が半数を占めているが、自分で本を見つけられたら OK ということもある。（レファレンスサービスサービスについて）知っているが使う必要がなかった人もいるはず。そこは切り分けて考えてもよいかと思う。

館長：次回、項目を設定する際に参考にする。

委員：職員に聞かなくても自分で本を見つけることができた場合は、サービスの利用には至らない。サービスの認知度は別で知りたい。

委員：その件に関連して、先日から書架の表示の文字が少し小さくなったのではないか。非常に見にくいと感じる。自身で発見して自己完結できるのが一番よいというのであれば、棚の案内表示は大事。なぜ小さくなったのか。

館長：職員より本の背表紙のラベルのデザインに寄せたいという提案があった。遠くからの視認性も大切かと思う。こんな意見があったということは伝える。

委員：自分でも本を探している時、見つけられなければあきらめてしまう。職員が忙しそうにしていると、「わざわざこんなことを聞くのも…」と思ってしまう。もう少し聞きやすくならないか。

館長：図書館司書の腕の見せ所。聞きやすい雰囲気、隙を見せながら働く。

委員；野洲は親切で聞きやすい雰囲気がある。県立は忙殺されているのが表情に出ていて、込み入ったこ

とを聞かれていることも多く、話しかけづらい。

委員：県立でも、「余裕がある時は返却本を持ってフロアに出る」ことは伝えている。本をたくさん持ちすぎていると話しかけづらいので、少なめに持って、利用者には積極的に声をかけるように伝えている。

館長：難しい部分。特に土曜・日曜はカウンターの司書が足りていることも多いので、なるべく積極的にフロアに出るようにと声掛けはしている。カウンターで待っているのも司書にとってはプレッシャー。キャリアが浅い司書については、利用者が近づいてきて何か尋ねられることへのプレッシャーがある。ある程度経験があると、聞かれたこと以上にいろいろな話ができるようになるが、聞かれたことにしか対応できないという場面も見られるのは確か。その部分のスキルアップは重要。野洲図書館はカウンターから開架の様子がよく見えるのでやりやすいはず。カウンターの垣根を超える意識が大切。

委員：フロアに出て、困っている人には声をかけることが大切。「大丈夫です」と言われることもあるが、若い職員にも継承していく必要があると痛感している。

委員：先日、県立でかわいそうだと思ったのは、官報について調べたいという人が来ていて、込み入った話になっていた。資料を引っ張り出すのも大変だと思った。

委員：レファレンスの聞きやすさは館内全体の静けさにもよると思う。静まり返っていると、自分が質問する内容が周囲に筒抜けになってしまうので聞きづらいこともあるのでは。レファレンスについて何か不満を持っている人はごくわずかだと思う。別の視点からサービスについて考えられるとよいが。広く深い知識と豊富な経験、想像力が必要なスキルの習得は長い時間を要すると思われるため、スキルを上げるのは長期目標でないと難しいと思う。

館長：図書館の情報提供の機能について、資料を利用者が見つけて借りていくという機能と、利用者が見つけられなかった資料と利用者を司書が結び付ける機能二つが両輪となる。現在のところ、車輪の大きさには大きな差異があり、バランスが良いとは言えないが、図書館としては、司書の必要性という問題にもかかってくるので、きちんと資料の提供ができているかどうかは引き続き（アンケートで）聞いていきたいところ。一方で、利用者が司書の手助けなく、求める情報・本にたどり着ける書架の作りかたやHP・蔵書検索システムの作り方は整理が必要。これからＡＩの普及が進むが、レファレンスの部分は司書ががんばっていかなければと思っている。

委員：以前テレビで、子供たちが調べものをして、ネットで複数のサイトから確認したのに誤りだったケースが紹介されていた。異なる複数のサイトは、よく調べると同じ情報をもとにしてつくられていたということで、調べものをするには司書に相談を、司書はなんでも知っているという紹介をされていた。なんでもネットで調べる危険性を感じたので、レファレンスサービスは大事だと思った。

館長：司書も知らないことは多い。ベテランの司書は広く浅く、ある程度体系的な知識を持っているが、それでも知らないことは多い。利用者の方はそれぞれの専門分野を聞いてこられるので、言葉の意味から分からないこともある。そこから求める情報までどうたどり着くかというスキルを持っているのが司書。
ただ、ネット情報については、職員から「ある利用者が本のタイトルが書かれたリストを持ってきて、取り寄せを希望しているが、国会図書館の所蔵含めデータが見つからなかった。利用者に確認するとＡＩから出力されたリストだった。存在しない本について、タイトルや実在する出版社、所蔵情報までもっともらしいことが書いてある。」という報告もあった。翻弄されることもあり厄介だが、AI の精度はこれから上がっていくはず。その中で「図書館はどうするか」、という危機感はある。

委員：ＡＩの話もあったが、図書館に行って相談すると司書が相談にのってくださる。人と関わるということを図書館には大切にしてもらいたい。機械に任せられるところもあるが、最後に「相談してよかったな」と思えるようにしてほしい。

館長：好意的な意見もあるが、Google のロコミなどでは批判もある。利用者との接し方、コミュニケーションの取り方、利用者が帰るときに期待以上の物を持って帰れるようにするのが司書の専門性が一番発揮される部分。厳しいが、そこは専門職の司書としてやってもらいたい。もし、何か期待はずれなことなどあれば教えてほしい。改善したい。

会長：自己評価Ｂをつけているが、辛口のコメントを。目標が高いのかもしれないが、常設展示や移動図書館など頑張っているのに目標値に達していないことが多い。理由としては、新しい本などが入ってこないことが大きいのでは。「選書の際にはより内容を精査し」と評価シートにあるが、具体的には何を意識されているのか。

館長：選書について、特に実用書などで、買うタイミングなどをより精査するようになった。既存資料である程度カバーできている分野について、知識の更新を今するのか、待つのか、その選択をよりシビアにおこなうようになった。一番わかりやすいところでは旅行ガイド。すべての地域について毎年更新していきたいところだが、毎年の更新を控えている地域もある。利用の多い・少ないも見ながら決めている。今まではバリエーションとして買うこともあったが、その入り口をせばめている。また、利用者にご迷惑をおかけしている部分では、人気のある本の複本購入も控えるようになった。昔は半年待たせないよう 6 人待ちで 1 冊、ここ数年は 8 人待ち、今ではバリエーションの確保のため、ものによっては 10 カ月待ち・一年待ちになるまで抑えているものもある。利用者には長い時間待ってもらうことになって満足度も下がり、人気だった本が棚に戻るのも遅くなる。最近だと『成瀬（天下を取りに行く・信じた道をゆく)』がやっと棚に戻ってきた。10 冊ほど購入しているが、本来ならもっと早く誰でも手に取れる状態になるべき。複本の購入については出版社の批判もあるが、利用者が求める本を提供するのが図書館の役割でもある。例えば高齢の方にとって、本を待つ

1年はとても貴重。県立図書館で何人待ちだからこの本は野洲で購入という判断をすることもある。1冊1冊の購入の判断がよりシビアになっている。

委員：予約件数について、図書館では予約件数とリクエスト件数を分けて考えることがある。リクエストは「所蔵がない」本についての要求で、順番待ちとは異なる。リクエスト・予約を区別した内訳はどこかに出ているか。買える本が少なくなっている場合、そこに要求をどれだけ出してもらえるかというのは図書館への信頼度による。予約とリクエストの数値は切り分けて分析する必要があるのでは。図書館から出版された本について情報発信をしたり、読みたい本があれば取り寄せをしたりなどして何とかして提供する、というＰＲも必要か。

館長：統計としてはリクエストと予約の切り分けはできていなかった。主体的な選書と、リクエストによる選書が分けにくい場合もある。体感にはなるが、木曜日に開く選書会議で最近リクエストに回ってくる件数は減っている。リクエストを出される方がヘビーユーザーに偏っていて、リクエストができるということが広く知られなくなってきている可能性もある。様々なリクエストが増えると対応は大変にはなるが、サービスとして知っていただくのは必要かと思う。よくリクエストを出される方には「これも（購入せず）借用に回ったのか」と感じている方もいるかもしれない。購入したいと思いつつも、県立に依頼することもある。

委員：2年前、2023年の実績になるが、野洲図書館がほかの館から借りて提供している件数（借受冊数）はここに挙がっている6館のうち野洲が2000冊以上で特に多い。ほかの館は1300冊程度。これは、野洲で持っていない本へもたくさんリクエストがあってそれに応えているとも考えられる。資料費が厳しい中でも、そういう要求が出てきているというポジティブな面ではないか。野々市市は自分の館で用意している可能性もあるが500冊ほど。

会長：2番、子供と若者をつなぐというシートに移る。

館長：委員に小学校の校長先生がいらっしゃるので、学校の現状について報告をお願いしたい。

委員：学校の立場から。野洲図書館はとても親切。公立図書館と学校・園との距離が近い。今日もブックトークを実施してもらった。いろんな取り組みをされ、子どもの読書推進に十分関わっている。今年から学校司書が配置されたが、去年支援員がつくった道筋・成果を学校司書がひきついでくださっている。例えば、祇王小では朝、授業前に図書室が開いている。図書室での貸出も増えたという実感がある。金曜日は常駐なので、金曜日に学級で本を借りて土日に家で読む「うちどくフライデー」を実施している。学校司書から聞いた話で嬉しかったのは、読書に積極的でなかった子からの「本が好き」という言葉であったり、「学校司書と本の話ができるのが楽しい」という声であった。少しずつではあるが、居場所としても図書室が機能するようになってきた。学校司書は現在2人ついているが、とても効果があらわれている。

去年から学校司書が授業支援に入ってくださり、授業で作ったＰＯＰなどの成果物を図書館で展

示し、土日・放課後にそれを見に保護者と来館するという取り組みもおこなっている。子供・保護者も巻き込んだ来館を促す取り組みにつながっているのではないかと思う。
また、移動図書館車の話も出ていて、わくわくしている。中主小など図書館から遠い小学校では移動図書館をしてもらっていたが、移動図書館車が導入されれば以前からの移動図書館はなくなるのか、両方くるのか。軽トラサイズと聞いたが、どれくらい本を積めるのか。月１程度の回数では、殺到して全員が借りられないのではないか。もっと大きいサイズの車であれば子どもたちにも刺激になりそうだが、その点は心配している。

館長：学校図書館の現状については一番実感をお持ちであろう現場の先生からご報告いただければと思い、お話いただいた。学校図書館は学務課の管轄で図書館の管轄ではないが、当然必要だと思われることは様々な場面で示していきたい。学校からの声もあがらなければ学校図書館の事業も進められないので、色々なところで説明いただければと思う。移動図書館車事業についてはのちほどご報告する。

会長：評価シートで、令和８年の年齢別の実利用者の目標数が令和７年から 13～18 歳だけ 550 から 460 に下がっているのはなぜか。

館長：目標値を実績値に寄せた。

委員：実利用者数の目標は下がっているが、利用率は変化がない。母数、人数が少なくなったということか。

館長：13～18 歳、中高生、ＹＡ（ヤングアダルト）世代の利用については課題。小学校には学校司書が入って、小学校の児童が本を読みたくなるような働きかけをしてくださっている。中学校については週１回整備をおこなうのみの現状で、学校司書がいない中で、現場での読書活動の推進が進んでいない。中学校は忙しく、昼休みの利用が難しい。放課後の利用の例もあるが、学校司書の配置がないと難しい。最近図書館のフリースペースでテスト前に勉強している姿は見かける。図書館に来るモチベーションがある中高生が増えてきたのかと思う。どう読書につなげるかは課題。
野洲高校とも連携予定。茶道部・軽音部の秋風ブックフェスタへの参加含め、関わりを増やしていきたい。高校の図書室との連携などの構想はあるが、現時点ではこのような現状維持から少し理想を目指す、という目標設定にならざるを得ない。

会長：ほか、よろしいか。では３つめ「誰もが利用できる図書館サービス」について、何かあれば。
外国の方の利用、外国語資料の利用は現在どれくらいか。

館長：窓口に来られている（おそらく）外国籍の方の多くは、日本語資料を使われている。子ども用の英語の本などの貸出はあるが、利用としては特定の 10 名ほど。一時期タガログ語の資料の整理なども進めていたタイミングで、「こんな本もあるんだ」という声もあったが、数十冊ずつのコレクシ

ョンなのが現状で、まだまだ進展の余地がある。国際協会との連携や、県内の図書館ではこれだけ資料があるというＰＲが必要か。データベースの共通化、共有化ができるとよい。横断検索などで、●語の本～という探し方は難しい。

委員：県立図書館ではシステムの構成上広く出てくるが、そういった言語別の検索も可能。検索結果をさらに絞り込むこともできる。

館長：取り寄せも気軽にできるという案内が必要。

委員：外国語資料の受け入れ件数があるが、各言語の内訳は。

館長：ほぼ英語。英語を置いておけば、どちらかといえばラテン語系の本の整理を進めなければならない。ポルトガル語、スペイン語など。あとはアジア系の言語の資料。状況ははかばかしくない。

会長：事業評価については、コメントがある方は記入のうえ、ＡＢＣＤの評価をし、8/31 までに図書館まで提出してほしい。

館長：事前にデータ配布しているＥｘｃｅｌファイルに入力いただいて返送しても可。ただ、去年ＦＡＸでいただいた方の中で、文字が読めなくなってしまった部分があったので、できれば紙の現物かデータでご提出いただきたい。

委員：分野別の貸出について、突出して多い分類があるのはなぜか。野洲図書館としての特徴なのか。

館長：図書館の分類に関わるところ。5 類は技術・工学の分野で家政学を含むため、料理などの実用書が入ってくる。7 類は芸術の分野だが、漫画やスポーツなども含むためと思われる。

会長：では、野洲図書館事業について。

館長：今年度の事業については四分の一が過ぎたところ。化石、一日図書館員、としょかんでよふかし、秋風ブックフェスタなど、例年おこなっているような事業については継続して進める予定。随時ご案内する。一日図書館員については無事定員に達した。今回はオンライン申請のみとしたので、申し込みの進み方が例年と異なったが無事集まった。「石展」については一年で終了予定だったところ、好評だったため継続を予定。事業についてはその都度になるが、大きな点で 2 つご報告する。まず、昨年の協議会で図書館基本方針の作成について話をしていたが、もう一つの事業である移動図書館車関連の業務により、方針作成の業務ができない状況で、移動図書館車の導入事務が落ち着くまでペンディングとさせていただきたい。止めるのではなく、どこかのタイミングでご相談させていただければと思う。基本方針の素案を協議会で示すための準備を内々に進めていくことは考えている。ただ、今年は移動図書館車の導入を進めていきたい。この事業に関連して、資料⑧として

議会の質問をお配りしている。図書館業界では珍しくない事業だが、予想外に注目を集めており、6 月の議会でも質問があった。巡回のルート、学校司書との連携、住民とのコミュニケーションについてなど。今後検討していくような点へも多数言及があったが、期待を寄せていただいているということでポジティブに進めていきたい。議会の答弁については一度ご確認いただきたい。寄せられた質問内容と答弁をほぼそのまま載せている。

3 月の図書館協議会でお配りした野洲市移動図書館車事業の政策提案のチラシにもあった通り、移動図書館車の導入については、子供たちに本を届ける、地域（高齢者）に本を届ける、イベントに出かけるという 3 つの柱で考えていたが、調整が大変。松本先生からも質問があったが、どう進めていくかは要検討。小さな車なので、何十人も児童が群がると危険であることは想像できる。落ち着くまでは今までの移動図書館の補助的な役割になるかもしれない。三上小・篠原小など小規模校にはちょうどいいサイズだが、野洲小など児童の数が多い学校では本も足りず、危険・混乱を生んでしまうかと考えている。学校と協議して安全に進めていく必要があるが、車を取り囲んでもらえるほどのモチベーションがあるということは、学校に巡回することで子どもの読書活動推進にもつながる。移動図書館車と、篠原・三上・中主に巡回している従来の館外貸出事業を両立することは難しいかもしれないが、まず学校司書の配置によって子供の読書環境を整備したうえで、移動図書館車できっかけをつくれればよいか。ただ、移動図書館車が巡回しているから学校司書は不要だという声があがらないようにしたい。子どものいる現場への巡回は学校への巡回を第一に。余力が出てきたタイミングで放課後の子どもたちや就学前の子どもなどにも巡回したいが、計画を考えると現実的にはあきらめざるをえないか。

次に、地域の高齢者について。もとの起案時、免許を返納した高齢者にも本を届けるということも狙いの一つだった。しかし、自治会を数えると野洲市内でおよそ 100 弱あり全ての場所は回り切れない。図書館から遠く、ある程度の利用が見込める一定以上の規模の地域から設定することになるか。地理的に近く見えても、必要とされている方が多い場所には巡回が必要だと考えているが、すべてを巡回することはできないため、お叱りは覚悟している。ただ、老人会などイベントに合わせてスポット運行として移動図書館車の巡回・お話会・貸出などはおこないたい。学校にも巡回できるかは未定と伝えているが、事業とタイミングを合わせていくことは可能か。今申し上げたことは、館内でもまだ未調整。令和 9 年度から開始という計画だが、少しずつ移動図書館車の存在を浸透させていけるように取り組みたい。

事務的な話もお伝えしておくと、車の入札は完了しており、現在はデザインを検討中。今後市長に進捗を報告予定。移動図書館車の入れる書庫の改修は夏～秋ごろ予定。夏に進める予定なのが、移動図書館車の愛称募集。移動図書館車で一番有名なのは「ひまわり号」。本を届けることを最初に始めた、貸出を中心とした移動図書館車。近くだと近江八幡の「はちっこブック号」など。広報やす 8 月号に募集の記事を掲載、8 月 7 日から 9 月の「としょかんでよふかし」の日（9/20）まで。その後、事務局である程度審査したのち、第 2 回図書館協議会で審査・選考して決定としたい。「としょかんＢＯＸ」のネーミングも同じ形で決定した。改めて選考委員会を設けるのが難しかったため。次回協議会の前までに情報提供をおこなうので、次回協議会では愛称の決定と事業評価を行う予定。予定が詰まっているが、よろしくお願いしたい。

委員：自分も応募してもいいのか。

館長：可能。「としょかんＢＯＸ」も現在では浸透している。どんな案がくるか分からないが、名前を選べたら浸透はしていくかと考えている。愛称募集については館内でのＰＲ・ホームページでの申し込みのほか、市内小学校の児童には一枚ずつ配布予定。現６年生はおそらく学校（中学校）で移動図書館車を利用することができないが、子供の感性で考えたものの中にもいい物がきっとあると思う。

委員：小学校向けにはいつチラシを配布するのか。早い方がよいが。

館長：夏休みまでには。早めのほうがよいか。担当には伝えておく。

会長：移動図書館車では、予約本の受取も可能なのか。

館長：まだこれから検討予定。アルプラ移動図書館では予約本の受け渡しもしているが、人気本の場合は回転が止まってしまうこと、借用本などは借用のタイミングが難しくなるなど課題がある。今はアルプラというＩステーションのみのため対応可能だが、移動図書館車のステーションでできるかは課題。

会長：コロナ前にやっていた「としょかんまつり」はもうやらないのか。

館長：「まつり」として成立させられるようなフォーマットをつくるのが難しくなってきている。現在は「ひと箱古本市」から派生した「秋風ブックフェスタ」にバージョンアップしたと位置付けている。ほかの自治体のように「まつり」とするなら、お話会サークルさんなどと連携して市民で作ってもらう形がよいかと思っているが、現状は難しい。

会長：デジタル教科書の導入が進んでいるが、図書館でもデジタル教科書を借りられるようになるのか。

館長：これからもデジタルの教科書のみという形にはならないのではないか。日本全国としてデジタルの教科書のみという形にならない限りは、デジタルと紙のよいところを合わせて使っていくのではないか。もしデジタルの教科書のみという形になった場合は検討する。

委員：以前協議会委員だったＯさんが本を書かれている。既に読んだが面白かった。

館長：図書館の方でも購入予定で、すでに発注している。

会長：議題は以上。

館長：今回も様々な意見をいただき感謝する。運営している側では気づかない意見もあり色んな気づきがある。今年度も業務の改善にいかしていきたい。図書館の評価についてはご多忙のなか申し訳ないが、8 月 31 日を目安によろしくお願いしたい。厳しい意見もお待ちしている。第 2 回の日程調整も、移動図書館車の愛称募集の件があり候補日が少なくなり申し訳ない。愛称が決まらなければ移動図書館車のデザインの最終決定ができないため、できれば 10 月中旬までには第 2 回を開催したい。